

## ■正誤問題 (要点確認 15 問)

鉄筋コンクリート造の配筋・継手に関する問題です。○×で回答して下さい。

1. 径の異なる鉄筋の重ね継手の長さは、細いほうの鉄筋の径を基準として算出する。
2. スパイラル筋の末端を重ね継手とする場合は、フック付きとする。
3. D35以上の異形鉄筋は、原則として、重ね継手とする。
4. 鉄筋の継手は、原則として、部材に生じる力の小さい箇所で、かつ、常時はコンクリートに圧縮応力が生じている部分に設ける。
5. 同一種類の鉄筋において、圧接の性能に支障がないことを確認できれば、銘柄の異なる鉄筋相互の継手をガス圧接継手としてもよい。
6. 柱主筋をガス圧接する場合、各鉄筋の継手位置は、原則として、同じ高さに設けてはならない。
7. 鉄筋の機械式継手については、構造計算の方法及び継手の使用箇所に応じて、継手部分の強度・剛性・靱性等に基づく継手性能の分類に従って使用することができる。
8. 帯筋の末端部のフックは、90°以上に折り曲げて定着させる。
9. 同一種類の鉄筋で、圧接の性能に支障がなければ、製造会社の異なる鉄筋相互であってもガス圧接継手を設けてもよい。
10. 柱梁接合部内の帯筋の間隔は、原則として、150mm以下、かつ、その接合部に隣接する柱の帯筋間隔の1.5倍以下とする。
11. 帯筋の効果は、端部の定着形状により異なる。
12. 柱の帯筋は、コンクリートとともにせん断力に抵抗する。
13. 柱の帯筋は、主軸(縦筋)の座屈を防止する効果は、期待できない。
14. 柱の帯筋は、曲げモーメントに抵抗する効果は、一般に、期待できない。
15. 柱の帯筋は、密に設けることにより、たとえ柱がせん断破壊しても、軸力をある程度保持し、急激な耐力低下を防ぐ効果が期待できる。

## ■正誤問題 解答編

1. 径の異なる鉄筋の重ね継手の長さは、細いほうの鉄筋の径を基準として算出する。
1. ○
2. スパイラル筋の末端を重ね継手とする場合は、フック付きとする。
2. ○
3. D35以上の異形鉄筋は、原則として、重ね継手とする。
3. × D35以上の異形鉄筋は、原則として重ね継手では継ぎません。その理由には、かぶりコンクリートに割裂が生じやすい事やコンクリート打ち込みが困難になる事などがあります。
4. 鉄筋の継手は、原則として、部材に生じる力の小さい箇所で、かつ、常時はコンクリートに圧縮応力が生じている部分に設ける。
4. ○
5. 同一種類の鉄筋において、圧接の性能に支障がないことを確認できれば、銘柄の異なる鉄筋相互の継手をガス圧接継手としてもよい。
5. ○ 圧接の性能に支障がないことが確認されていれば可です。
6. 柱主筋をガス圧接する場合、各鉄筋の継手位置は、原則として、同じ高さに設けてはならない。
6. ○ ガス圧接の継手位置は、原則として鉄筋応力の大きいところを避け、部材の同一箇所に集中させない。継手部分は継いでいない部分よりも弱いためです。
7. 鉄筋の機械式継手については、構造計算の方法及び継手の使用箇所に応じて、継手部分の強度・剛性・靱性等に基づく継手性能の分類に従って使用することができる。
7. ○
8. 帯筋の末端部のフックは、90°以上に折り曲げて定着させる。
8. × 帯筋の末端部は、135°以上に曲げて定着します。
9. 同一種類の鉄筋で、圧接の性能に支障がなければ、製造会社の異なる鉄筋相互であってもガス圧接継手を設けてもよい。
9. ○
10. 柱梁接合部内の帯筋の間隔は、原則として、150mm以下、かつ、その接合部に隣接する柱の帯筋間隔の1.5倍以下とする。
10. ○

11. 帯筋の効果は、端部の定着形状により異なる。

11. ○

12. 柱の帯筋は、コンクリートとともにせん断力に抵抗する。

12. ○

13. 柱の帯筋は、主軸（縦筋）の座屈を防止する効果は、期待できない。

13. × **主筋の座屈を防止する事も役割の1つです。**

14. 柱の帯筋は、曲げモーメントに抵抗する効果は、一般に、期待できない。

14. ○

15. 柱の帯筋は、密に設けることにより、たとえ柱がせん断破壊しても、軸力をある程度保持し、急激な耐力低下を防ぐ効果が期待できる。

15. ○

